神積寺の歴史と縁起

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター
学術研究員　井上　舞

はじめに ― 柳田國男と神積寺

福崎が生んだ民俗学者柳田國男は、『故郷七十年』の中で、繰り返し福崎についての思い出を語っている。その中で柳田が、「子供にとっては、その行事はいちばん大きい興奮で、今もよく憶えている」と語っているのが、現在も続く神積寺の伝統行事「鬼追い」である。柳田が見た鬼追いと現在の鬼追いの間には、時代を経て若干の変化が生じているかも知れない。とはいえ、「いちばん大きい興奮」と言うからには、かつても山の神と二匹の鬼が松明を振りかざし、参拝客の間を縫って境内を舞い踊ったのではないだろうか。そして、その勇壮な様は、少年時代の柳田國男に強い印象を残したに違いない。

また、柳田の実家である松岡家は、もともと神積寺の檀家であった。しかし、さまざまな事情があって、いったんは檀家の縁を切られていたようである。その後、松岡の一族は関東に移り住んだものの、先祖の墓はそのまま福崎に残されていた。そこで、柳田の考えもあって、先祖の墓を神積寺内の悟真院に合祀し、その世話を三木家に頼んだと、これもまた『故郷七十年』に残る話である。

この神積寺。本尊の薬師如来は、日頃は秘仏とされ、六十年に一度だけ、ご開帳が行われる。柳田が辻川で暮らしていた時期には、ご開帳は行われていない。とはいえ、周囲の人々から、ご開帳の折の話ぐらいは聞いたことがあっただろう。もし、柳田がご開帳に巡り会っていたならば、あるいは『故郷七十年』にもうひとつ、福崎にかんするエピソードが加わっていたのだろうか。

さて、平成二十六年は、まさにご開帳の年であった。期間中は、ご開帳にともなう各種法要のほか、さまざまなイベントが催されていた。特に、現代アートとのコラボレーションは、これまでのご開帳にはない、新しい試みであったといえよう。かくいう私も、薬師如来を拝観するために神積寺を訪れ、趣のある建物や庭の内に配された絵画やオブジェに驚かされながら、境内の散歩を楽しんだ一人である。

私と本尊薬師如来との結縁譚は、後で話すこととして、本題に移ろう。本稿の目的は、神積寺がどのような歴史をたどってきたかについて紹介することにある。とはいえ、この場で一千年の長きにわたる同寺の歴史を語り尽くすことは難しい。よって、ここでは中世という時代に焦点をあて、いくつかの資料を取り上げながら、その歴史の一端をひもといてみたい。

一　神積寺の歴史

（1）古代の神積寺

神積寺の縁起によれば、同寺の開創は正暦二年（九九一）とされる。ただ、これにかんする傍証資料は現在のところ確認されていない。神積寺の名前が確認できる最も古い資料は、保延四年（一一三八）のものになる。播磨国の在庁官人（国衙の役人）桑原貞助によって催された、写経事業の参加僧に「妙徳寺僧玄真」の名が見えるのが、それである。ここには「妙徳寺」とあるが、現在呼びならわされている「妙徳山神積寺」の寺名が見えるのは、実は近世に入ってからのこと。それ以前は「妙徳寺」の名が用いられていたようである。もっとも、本稿では混乱を避けるため、資料を引用するとき以外は「神積寺」の呼称を用いておく。

桑原貞助が催した写経事業は、数多の僧に参加を呼びかけ、大般若経全六百巻を一日で写経するという、壮大な事業であった。現在、書写された経典は、一部しか残っていないが、そこに記されていた寺院を分析した研究によれば、写経に参加した僧の所属寺院は、その多くが桑原氏の勢力圏内にあったことが指摘されている。

ところで、この写経事業が行われたころ、神積寺がある田原地域は、中央の貴族である源師行の所領となっていた。それを示す資料が、保延七年（一一四一）に発給された「鳥羽院庁下文」という文書である。この文書によれば、もともと田原地域は、播磨国大掾伊和豊忠の一族が代々

受け継いできた土地であった。それが、永祚元年（九八九）に、豊忠の外孫である桑原為成に譲られ、さらに幾人かの相伝を経て、大治三年（一一二八）に源師行の手に渡ることになったという。

この文書に見える桑原為成と、写経事業を行った桑原貞助との間には、およそ百五十年の時代の開きがあるが、同族と見られている。伊和豊忠から桑原為成に土地が譲られて以降、この地が桑原氏に代々受け継がれてきたのか、あるいは伊和氏の手に戻ったのかについては、諸説あって定かではない。ただ、先にも述べたように、桑原貞助の写経事業に神積寺が参加していることを考えれば、桑原氏は何らかの形で田原の地と関係を持っていたのだろう。そして、神積寺もまた桑原氏の庇護を受けており、そのために神積寺の僧が写経事業に参加したのだとすれば、神積寺の創建は、伊和氏や桑原氏が田原の地を支配していた頃にまでさかのぼれるのではないだろうか。

ちなみに、「鳥羽院庁下文」によれば、保延七年（一一四一）に、源師行は鳥羽院にこの地を寄進している。ここに田原荘が成立し、以後、古代末期から中世にかけて、神積寺は田原荘内の寺院として存在することになるのである。

（2）田原荘と神積寺

さて、保延七年に田原の地は鳥羽院の荘園となった。その後、荘園領主は何度か変遷し、鎌倉時代になると、九条家領として資料に登場する。

九条家は中央の名門貴族で、田原荘の他にも多くの荘園を持っていた。同家には、こうした荘園にかんする文書が多く残っている。そのうちの一通。正応四年（一二九二）の「田原荘実検注進状」は、荘内における神積寺の立ち位置を知ることのできる好史料である。

同文書は、田原荘の検地記録である。ここには、当時の田原荘が保有する田地の総数のほか、除田や定田の内訳が記されている。その詳細については、『福崎町史』で子細に検討されているのでそちらに譲る。本稿では、神積寺にかんする箇所のみを確認しておきたい。

「田原荘実検注進状」によれば、当時田原荘が保有していた田地は、二百五町六反三十二代。そのうち、年貢や公事などが賦課されない「除田」が、九十三町三十三代あった。なお、通常、荘園や荘園内の寺社を運営する経費は、この除田の収入からまかなわれていた。この除田分のうち、寺社の経営や荘内で行われる宗教行事のために充てられているのが、二十四町七反五十三代。そのうちの半分近く、十一町四反三十七代が神積寺分の除田となっている。ちなみに、これに次ぐのが「西光寺」の三町。その次が「与位社」の一町であることを考えると、神積寺が、荘内の他の寺社に比べて、圧倒的に広い除田を設定されていることがわかる。さらに、他の寺社については、寺社の名前と除田数のみが並ぶだけだが、神積寺にかんしては、寺院そのものの経営分のほか、寺院内で催される大般若会や仁王講、来迎会などの各種法会を営むための除田、堂舎の修理のための除田など、細かな内訳が設定されている。

つまり、神積寺のように、多くの除田を認められていれば、それだけ安定した経営を行うことができたのである。これは、言い換えれば、田原荘が神積寺を保護すべき重要な対象としてみなしていたことを示す。また、南北朝期の播磨で成立した『峯相記』によれば、神積寺は書写山・増位山・法華山・八徳山・普光寺とともに、国衙が主催する鎮護国家の祈祷を行っていたという。このように、播磨国内においても重要な役割を担わされていた寺院であることも、荘園内における神積寺の立場を有利にする方向に働いたはずである。

ちなみに、こののち田原荘は、戦国時代の混乱の中で荘園が有名無実化するまで、九条家領として在り続けた。残された資料をみる限りは、神積寺と田原荘は、時折相論があったものの、穏やかな関係を続けていたようである。中世という時代は、荘園領主の盛衰によって、荘園内の寺社の行く末が左右される時代でもあった。そうした時代の中で、九条家という安定した領主を得、かつその保護を受けられたことが、神積寺が今に歴史を繋ぐことのできた理由の一つといえるだろう。

二　神積寺の縁起

（1）縁起から見えるもの

ここまで、古代から中世にかけての資料上にみえる神積寺の姿を追ってきたが、もうひとつ、同寺の歴史を考える上で重要な資料をみてみたい。神積寺の縁起である。縁起とは、寺院や神社の創建の由来を記したものである。一般に、その内容には史実と虚実とが入り交じったものが多い。よって、そこに書かれた内容を全て「史実」と受け取ることはでき

ない。とはいえ、中世にあっては、寺社が自ら、人々の信仰を集め、寄進を募り、堂舎を維持していく必要があった。先に述べたように、神積寺は九条家領内で他の寺社に比べて破格の待遇を受けていた。しかし、それは荘園側が一方的に神積寺に信仰を寄せたのではなく、神積寺の側が信仰を寄せられるために努力した結果なのである。そして、信仰を得るための重要なアイテムの一つが、寺社の霊験・利益を喧伝する「縁起」だったのである。これを念頭におきつつ、以下、神積寺の縁起を読み解いてみたい。

（2）慶芳内供について

資料上から確認できる神積寺の縁起のうち、もっとも古いものは、先述の『峯相記』に残されている。まずは、その本文を見てみよう。

次妙徳寺者、大納言範卿ノ息、慶芳内供最初ノ建立、一条・三条両帝ノ御願所也、彼内供、西国巡礼ノ次、正暦二年三月八日、当国田原ノ庄有井村ニ一宿、夢ノ内ニ貴僧一人出来リ、枕ニ立テ告ケテ云、此東ノ山ノ下ハ仏法繁昌ノ地、四神相応ノ砌ナルヘシ、汝ヲ待テ今ニ興セス、早ク寺ヲ立テ、薬師如来ヲ安置スヘシ、我ハ是薬師如来ノ応化妙徳菩薩也云々、霊夢ニ驚テ尋見ルニ、実ニ殊勝ノ霊地也、仍伽藍ヲ建立ス、（後略）

大納言範卿の子息である慶芳内供が、西国巡礼の折、播磨国田原荘有井村に一宿したところ、夢の中に貴僧が現れ、枕元に立って告げたことには、「この東の山の下は仏法繁昌の地、四神相応の場所である。おまえを待って、今まで事を起こさずにいた。早く寺院を建立し、薬師如来を安置しなさい。私は、薬師如来が応化した、妙徳菩薩である。」慶芳は霊夢に驚き、かの地を尋ねてみると、確かに優れた霊地であった。そこでこの地に伽藍を建立した。という内容である。このあと縁起には、範卿の妻妾が一条・三条両天皇の乳母であったために、同寺が天皇の御願寺となったこと、両天皇の寄進により、境内に多宝塔と常行堂が建立されたこと、三条天皇の七宮である覚照阿闍梨が慶芳の弟子として、寺務を執り行い、堂舎を整備したことなどが記されている。

この縁起に登場する人物については、すでに『福崎町史』でも指摘されているように、資料上からその実在を確認することができない。とはいえ、神積寺が人々の信仰を得るためにこの縁起を作ったのだとすれば、その内容には何らかの意味があるはずである。それを読み解く一つの指標となるのが、開創者の慶芳内供ではないだろうか。

慶芳内供については、鎌倉時代に九条家から出た僧、慶政をモデルにしたとみる向きもある。慶政は、当時の九条家当主であり、弟でもある道家との連携のもと、中世前期の文化形成に影響を与えた人物であることが、近年の研究から明らかになりつつある。また、寛喜元年（一二二九）には、書写山を訪れ、常行堂修造供養の導師を勤めており、播磨と全く無関係の人物でもない。確かに、九条家領内に位置する神積寺にしてみれば、慶政をモデルとした縁起を作ることによって、同家からいっそうの尊崇を得ることができるかもしれない。とはいえ、今のところ慶政と慶芳を繋ぐ糸は「慶」の一字のみである。この問題については、今少し検討が必要なように思われる。

開創者の問題に即してみるならば、慶芳は「内供」であった。むしろ、本稿ではこの役職に注目してみたい。内供とは、宮中に伺候して御斎会の読師などを務めた僧侶のことである。中世においては、名誉職の側面が強いが、かつては天台宗の開祖である最澄や、その後の天台宗の発展に寄与した円仁など、名だたる名僧が任じられていた。また、内供がかかわる御斎会とは、宮中において金光明最勝王経を講じ、国の安泰と五穀豊穣を祈願する法会である。この法会は、朝廷にとって重要な行事のひとつであった。

神積寺の縁起のなかで、妙徳菩薩は慶芳内供がこの地を訪れるのを待って、今まで事を起こさなかったのだと告げた。妙徳菩薩が慶芳のもとに現れた目的のひとつは、縁起にもあるように、自らの本来の姿である薬師如来を祀らせることにあっただろう。さらに、内供を開創者として指名するからには、この「仏法繁昌ノ地」で、宮中と同様に鎮護国家の法会を執り行わせようという意図が隠れていたのではないだろうか。

先の、「田原荘実検注進状」によれば、実際に神積寺では大般若経会や仁王講などの鎮護国家にかかわる法会が行われていたことがわかる。また『峯相記』にも、神積寺を含む六箇寺が「国衙ノ最勝王経講讃・仁王会」に参加していたことが知られる。中央の有力貴族、つまり政治の

中心にかかわっていた九条家にとっても、こうした法会を執り行う寺院は、積極的に庇護の対象となっただろう。

慶芳内供による開創という縁起の記述には、国衙に対して、あるいは九条家に対して、自らが鎮護国家の祈祷を行うにふさわしい寺院であることを主張していたのである。

(3) 出会いの場としての辻川

もうひとつ、神積寺の縁起のなかで注意しておきたいのは、慶芳内供が夢告を受けた場所である。今いちど縁起の該当箇所を確認すると、慶芳内供は西国巡礼の折に、田原荘有井村に一宿し、その夜の夢で「妙徳菩薩」から寺院を建立するよう告げられたという。かつて夢は、神仏と交接するための重要な回路と考えられていた。だから、夢中でお告げを受けたこと自体は、そう不思議な話ではない。問題は「有井村」のほうである。有井村の名は、現在には残っていない。ただ、辻川に在井堂という小堂があることから、おそらく辻川附近にあった村名と考えられている。

辻川は、北条から山崎へと抜ける東西の交通路と、姫路から但馬方面へと抜ける南北の交通路が交差する、文字通り「辻」である。そして、こうした道と道とが交差する場所は、実際に交通の要衝であったばかりでなく、呪術的な性格も持ちあわせていた。具体的には、異界との接点、神霊が集まる場所と観念されていたのである。後世の伝承になるが、近世の地誌『播磨鑑』には、同じく辻川にある鈴の森にかんする伝承が残っている。播磨一宮の伊和大明神が居所を移そうとした際、播磨中の神々がその手伝いのために鈴の森に集まったというのである。この伝承もまた、辻川の「辻」的性格の一端を示すものといえよう。この場所で、まさに慶芳と妙徳菩薩との邂逅が行われたのである。慶芳が有井村（＝辻川）に宿泊したという設定は、単にそこが交通の要衝であったからではない。「辻」を有する有井村こそが、人と仏が出会うのに相応しい場所だったのである。

出会いといえば、辻川で生まれ育った柳田國男は、辻川を通り過ぎる数多の人々との出会いが、今の自分を作ったと述懐している。交通の要衝として現実の人と出会い、異界との接点として仏と出会う。今も昔も辻川は〈出会いの場〉だったのである。先の開創伝承は、国衙や九条家への主張という側面が強かった。しかし一方で、縁起は有井村という、外部にとってはローカルな場所を出会いの場として設定した。そうした意味では、神積寺の縁起は確かに福崎の地に根付いて生まれたのである。

おわりに

平成二十六年十一月某日。抜けるような青空が広がり、涼やかな秋風に五色の幡がたなびく昼下がりのこと。私は妙徳山神積寺を訪れた。六十年に一度の機会。本尊薬師如来坐像を拝観するためである。平日ながら、境内には本尊に結縁しようと、数多の人々が集っていた。参道にある現代アートの案内看板に心を惹かれつつも、まずは本堂へ。護摩木を燃す煙に包まれながら、本堂に安置された前立仏の薬師如来像や、かつて岩尾神社に祀られていたという文殊菩薩を拝観する。そして、本堂を出たのち、木々に囲まれた小道を通り抜け、本尊が安置されている宝蔵庫へと向かう。

写真資料では何度か見たことがあるが、実物を見るのは初めてのこと。開け放たれた扉から中をのぞき込む。そこには、優しい顔をした仏の姿があった。ふっくらとした体躯。静かに人を見下ろす切れ長の目。その表情は少し微笑んでいるようにも見えた。そして、僅かに前方に曲げられた、右手の薬指。左手に持つ薬壺から霊薬を塗ってくれるというその指は、今にも動き出しそうな柔らかさで、こちらに差し向けられていた。

手を合わせた後も、立ち去りがたく、しばしその場にたたずむ。次にこの薬師如来に会えるのは六十年後。これが最後になるのだろうか。それとも、今一度会う機会があるのだろうか。六十年後の自分の年齢を考える。可能性はなきにしもあらず、だ。薬師如来は病苦を救う現世利益の仏という。どうかもう一度会えますように、と頭を垂れた。

【参考文献】

『福崎町史』第一巻／小林基伸「播磨国在庁官人桑原貞助発願一日頓写大般若経」（『わたりやぐら』4号、一九八七）／苅米一志「中世初期の国衙と寺院」（『就実大学史学論集』22号、二〇〇七）／近本謙介「慈円から慶政へ―九条家の信仰と文学における継承と展開」（『中世文学研究は日本文化を解明できるか』二〇〇六）／拙稿「中世田原荘の寺社について」（『福崎町連携事業平成22年度活動報告書』二〇一一）